

2025年11月20日

老々介護の事件は特別ではない!?

2024年7月、東京都国立市で71歳の女性が同居していた102歳の母親を殺害するという痛ましい事件が起きました。その後の裁判で、事件の背景が明らかになってきました。

71歳の娘と102歳母親は二人暮らし。母親は、102歳という年齢を考えれば当然だと思いますが認知症の症状があり、要介護認定を受けてケアマネジャーがつき、訪問介護、訪問看護等のサービスを受けていました。そして、自宅から1時間ほどの距離のところに妹家族がいたとのことでした。



母親はトイレが頻回で、都度、娘に連れて行ってくれとせがんでいたそうですが、娘も高齢ですから腰を痛めてしまい、トイレに連れていくのが難しい状況になってしまいました。そこでケアマネに相談し、母親に紙おむつを使ってもらうようになりましたが、それでも母親は10分おきに娘に連れて行くようにせがむことを止めなかったそうです。娘が「紙おむつだからトイレに行かなくても大丈夫」といっても母親は聞き入れず、ベッドから転落してしまった。しかし、娘は腰の痛みで母親をベッドに助け上げることができませんでした。そこで娘は110番通報しましたが、119番の救急隊に連絡するよう言われたそうです。救急隊はすぐに駆けつけて母親をベッドに戻し、親切に対応してくれたのですが、最後に「こういうことは今日限りですよ」と釘を刺されました。

救急隊が帰った10分後から、再び母親のトイレに連れて行ってほしいの懇願が始まり、娘はその1時間半後、母親の首を絞めるなどして殺害してしまったそうです。

110番の警察も、119番の救急隊も、誰も間違ったことはしていないし、言っています。しかし「こういうことは今日限り」と言われた娘は「胸に鉛が入ったかのように重く感じ、絶望感に襲われ、もう駄目だと思った」と証言しています。

「絶望感」という言葉がキーワードです。今ある制度を使っていても、認知症高齢者の介護を家族がひとりで担っている時間が長いと、それだけで孤独感や絶望感に押しつぶされそうになることが想像できます。

もちろん、孤独や絶望があるからといって、人を殺してよい理由にはなりません。この娘は、当然に罪を償わなければなりません。しかし、この事件の背景を聞いて「誰にでも起こり得るものだ」という感想を抱かずにはいられませんでした。

家族の介護をするということが、こんなにも孤独と絶望と隣り合わせになりやすいということに誰もが思いを致し、当事者がSOSを発しやすくする場を、そしてそのSOSの深刻度を見逃さない仕組みを作っていくなければならないと感じています。